

爲糧原神宮前停車場線新設工
 元九一年に行なわれ、七世紀
 後半から八世紀後半に及ぶ
 大規模で計画的な配置を採
 る建物群を発見し、雷丘北
 方遺跡と命名された。当該
 遺跡は飛鳥川右岸で、雷丘
 から小山に至る小丘陵との
 間の平坦地上に位置し、藤
 原京の条坊では左京十一条
 三坊西南・西北両坪にあた

1 所在地 奈良県高市郡明日香村雷字稲葉縄手

2 調査期間 一九九四年（平6）一月～四月

3 発掘機関
奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

4 調査担当者 代表 牛川喜幸

5 遺跡の種類 都城跡

6 遺跡の年代 七世紀後半～八世紀後半

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

明日香村雷の北で計画された県道飛鳥橿原神宮前停車場線新設工事に伴う事前調査は、第一次調査が一九九一年に行なわれ、七世紀

その後二次にわたる調査を実施し、中心部に四面庇付東西棟建物と、その東西に二棟ずつの細長い南北棟建物、また南にも一棟の長い東西棟建物を配し、これらの建物群の東西南の三方を掘立柱塼と溝で区画していたこと、また四面庇付建物が西南・西北両坪の南北中軸線上にあり、これらの建物が西北坪に入ることから、この遺跡が南北に二町分を占めていたことが明らかとなった。

今回の調査はその四次目で、遺跡の東への広がりの確認と、第三次調査において四面庇付建物の南で見つかった東西棟建物の全容を明らかにすることを目的として実施された。調査区は前者の目的のために東脇殿の東南方に一カ所、また後者のために四面庇付建物の南方で一部第三次調査区と重複させて二カ所、計三カ所に設けた。

調査面積は合計四三四㎡である。なお本調査は藤原宮第七一―一三三調査にあたる。

調査の結果検出した遺構には、東西棟建物、東西大溝、石敷、石敷の下層で検出した斜行溝、土坑、井戸、暗渠などがある。第三次調査で一部を検出したに止まった東西棟建物は、当初東西一七間、南北二間の規模で、のち南に庇を付けたが、奈良時代になって四面庇付東西棟建物の周囲に礎敷が行われた際に、廃絶されたことが判明した。また遺跡の東への広がりについては、遺跡中央部の南限を画する施設の一つである、東西大溝がさらに東へ延びることがわか

り、東限については、今後の調査に待たざるを得ないことも明らかになった。

木簡は、土坑SK三三四五から一〇点が出土した。SK三三四五は直径〇・五m、深さ〇・三mの小さなもので、石敷の下層で検出された、斜行溝SD三三四〇の堆積層中程から掘り込まれていた。なおSK三三四五からは、木簡以外に少量の土器が出土したに止まる。

8 木簡の釈文・内容

土坑SK三三四五

(1) ・「く恵思和上三」

・「く祥□□」

127×16×3 032

表に記された恵思は、和上の称号をもっていることや、木簡の出土した土坑の年代観などから、文武天皇二年（六九八）に僧正に任ぜられ（『続日本紀』文武二年三月壬午条）、大宝元年（七〇二）に死去したと伝える（『七大寺年表』大宝元年条）恵施にあたると推定される。

9 関連文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』二五（一九九五年）

（橋本義則）

